大ロル・アタベグ朝とモンゴル帝国

北川誠一

初めに

筆者は以前「ヤズド・カークーイェ朝とモンゴル人」[1]を発表して、モンゴルのイラン征服が圧倒的な軍事力をもって行われ、彼等の徴税政策が土着の社会と政治組織に大きな変化を与えたのは事実であるが、それは強調され過ぎてはならず、モンゴル帝国とイルハン国の時代を通して特に南イランを中心に、土着の政治機構が維持あるいは再組織されたことを強調した。同様の研究は、ヤズド以外の他の地方政権についても行わなければならないが、大ロルについて、筆者は既に「大ロル・アタベク朝の成立」[2]を発表して、モンゴル人の軍事的圧力が波及するまでの時代について述べたので、ここでは、モンゴル人の大ロル支配の初期の政治過程について述べたい。[3]

第一節　アタベク・テキラとアルプアルグー

大ロル・ファズルーイェ朝は、ホラズム帝国支配下において、ジバール（イラク・アジャミー）国主（Sāhib al-Jibāl）の地位にあった。[4] ホラズム帝国の西進以前にイスファハーンを領有していて、ホラズムに敵対し、アッバーズ朝カリフとより親密であったファールスのトルコ系王朝サルグル朝がいち早くモンゴルの宗主権を承認したのと異な

り、大ロルのモンゴル帝国編入は遅れた。

大ロルが、いつモンゴル帝国に服属したかを示す直接史料はない。しかし、状況証拠によるならば、その時期はモンケの即位、あるいはフラグのモンゴリア出発以前に遡らないであろう。先ず、モンケの即位と従兄弟クトブッディーンの帰国を知ったケルマーンのスルタン、ロクヌッディーンは、甥であったヤズドのアタベク・アラーウッダウラを供ない、カリフの保護を求めてバグダードに向かおうとするが、カリフに拒否され、荷物をロレスターンに置いたまま、ハーンのオルドにむかった。イラークー・アジェミーとバグダードとの交通路からみても、またアタベク・アルプアルグーが、ロクヌッディーンの娘をめとっていたことからしても、このロレスターンは、大ロルであろうと考えられる。[5] 上記の状況からしてこの時、大ロルはまだモンゴル帝国に臣従していなかったと考えられる。

モンケの即位式に出席したイラン総督アルグン・アカは、この時新皇帝モンケによってホラーサーン、マーザーンダラーン、インド、イラーク、ファールス、キルマーン、アラーン、モウスル、アレッポ、アルメニア、ルーム、ディヤールバクル等と共に「ロル」の支配権を与えられている。この「ロル」は、ロレスターン全体であろうか、それとも大、小ロルのいずれかであろうか。

さて、モンケが弟フラグにイラン遠征を命じたとき、主要な目的は、

一、イスマイル派教国征服

二、クルド人、ロル人の掃討

三、アッバース朝カリフ政権の打倒

であり、後に実際にバグダード遠征に先だってモンゴル軍による破壊活動を被ったクルド人とともに、ロル人が懲罰の対象に上げられている。しかし、小ロルが早くモンゴルに降っていることは明かであるので、アルグン・アカにあ

たえられた「ロル」は小ロル、掃討の対象とされたのは大ロルであろう。大ロルは、この時まだモンゴル帝国の支配下に入っていなかったのである。

更に、テキラはフラグのイラン到着に際して、キーシュ、トゥースに彼を出迎えた君主の中には数えられていない（Juvaini/Qazvini, III, 99, 105;/Boyle, II, 613, 617; Rashid/Alizade, III, 30）。大ロルのモンゴル服属の事実が諸年代記中に表れるのは、フラグのバグダード征服を目前にしてからである。バグダードを目指すモンゴル軍三翼中、キトブカの左翼軍は、『集史』「フラグ・ハン紀」によると、キトブガ以下クドスン（Qūdūsūn）、イルカ（Īlkā）等の諸将軍が、

ロレスターン、フーゼスターン、バヤート（Bayāt）及びオマーンの海岸までの地域から前進した（Rashid/Alizade, III, 52）。

とある。ハマダーンから、ロレスターンを経て、フーゼスターン北西部に入り、イラーク・アラビー北東部のバヤートに抜けたものと思われる。バヤートは、当時のトゥスタルーワースィット街道に近く、今日のティグリス川とイラン領のポシュト・イ・クーフ（Posht-i Kūh）に挟まれた地域、北からアル・アマーラ（Al-ʿAmārah）に向かって流れるティブ川（Nahr al-Tib）に近い地名であった。『集史』にはフラグ自身は、ハマダーン、ケルマンシャー経由でコルディスターンを通過し、同年ズルヒッジェ月バグダード方面に至ったが、

そのころ、キトブカ・ノヤンは、恩恵と武力によって、ロレスターン地方の多くを取った

とある。キトブカがハマダーンからホーズィスターンに直進したのであれば、ここで言う「ロレスターン」は、小ロルとするのが妥当であるが、モンゴリア出発に当って、フラグはモンケより、ロレスターン、コルディスターンの平定を命じられていて（Rashid/Alizade, III, 23）、フラグがウルミア湖のシャーヒー島に保管を命じた戦利品は、バグ

ダード、コルディスターン、アルメニアと供にロレスターンからもたらされたものであった事を考えると、キトブカの行動には単に南からバグダードに接近するだけでなく、カリフ直轄領であったホーズィスターン地方の確保が意図されていたのであろう。彼の左翼部隊はホーズィスターンからイラーク・アラビー州に前進すると南方のナハースィーェ(Nahā-syye)、サルサル(Sarsar)から、ティグリス川沿いにバグダードに接近した。

この間のアタベク・テキラの動向について、『集史』(Rashid/Alizade, Ⅲ, 52)には、バグダード攻撃に際して、

イーラーン・ザミーンの全スルターン、マリク、アタベクは、御前にいた。

とあり、『選史』(Qazvini/Navai, 543)『清浄園』(Khwandamir, Ⅳ, 625)には、

フラグ・ハンは彼をキトブカ・ノヤンの万人隊に差し向けた。

とあるから、バグダード包囲戦にあたって、アタベク・テキラは、キトブカの陣中にあったようである。

『選史』、『清浄園』及び『シャラフ・ナーメ』等によると、アタベク・テキラは、モンゴル軍によるバグダードの略奪とカリフの処刑を嘆いていたが、これを耳にしたフラグが、怒ったことを知り、許可なく、自国に帰還した。フラグは、キトブカとサルターク・ノヤンにテキラの逮捕を命じた。テキラの弟、シャムスッディーン・アルプアルグーは、釈明のためオルドに向かったが、国境付近でモンゴル軍と戦闘に陥り、捕えられた。マーンジャシュト城に籠城していたテキラは、安全を保証されて投降したが、タブリーズで処刑された。(6)

一方、『ムンテハブッタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 42-43)では、テキラ逃亡の理由は全く異なっている。

フラグ・ハンが、カリフの都バグダード征服を目指したとき、アタベク・テキラは、全軍を率いて従い、オルドに合流した。ホラーサーン、マーザンダラーン、イラークのイラン人は、彼らの方法に従って包囲に努力した。ロル人は、これ以前には、戦争において、城を持なかったので、彼らはこの努力を行わなかった。キトブカ・ノ

ヤンは、会合の席上テキラの頭を打った。テキラは、ロル人の気質どおり、怒ってある夜、許しなく退出し、ロレスターンに戻った。フラグ・ハンは、バグダード征服の後、キトブカ・ノヤンに彼の後を追わせ、オルドに連れて来るように命じた。アタベク・テキラは、困惑した。

弟、アルプアルグーが、使者として派遣され、テキラは、フラグの指輪の保証を信じて投降し、裁判にかけられるが、彼には秘かに仲間内の話があり、この反抗は、そのためであったことが、明らかになった。（中略）この罪が確定し、テキラは、処刑された。

『ムンテハブッタヴァーリーフ』の記事だけでは、要領を得ない罪状は、『選史』等を見れば明かである（Qazvini/Navai, 543）。

彼は、バグダードの人々の事件、カリフの殺害、ムスリムの敗北を悲しんだ。

アタベクはカリフに対する同情のために城攻めに加わらなかったと判断されたのである。テキラの没年については、ガッファーリーの『世界を飾る者の歴史』（Gaffari/Minovi, 171）に、

六五六年ラマザン月一五日タブリーズで殺された

とある。西歴一二五八年九月一五日である。諸家はすべてこの年次によるが、シュプーラーだけが、テキラの没年を六五七（一二五九）年としている。[7] テキラの遺体は、ロレスターンに運ばれたが、イスファハーンのザルダに埋葬された。[8]

フラグは大ロルの支配権を、意図せずしてモンゴル軍と戦闘状態に陥り、捕虜になっていたシャムスッディーン・アルプアルグーに与えた。『選史』（Qazvini/Navai, 544-545）には、

アルプアルグーがロレスターンに戻った時、国は荒れ果て、国民はある者は流浪し、ある者は困窮していることを知った。かれは、処置よろしく隠れた人々を集め、集まった人々を保護した。また、産業と農耕を奨励したの

で、僅かの間に繁栄の状態に至ったばかりか、天国、極楽も羨むありさまとなった。また、彼はアラブやモンゴルと同じく、「冬と夏の旅」を行い、冬はシューシュタル（Shūshutar）に至るイーザジュとスーサン（Sūsan）に、夏はサルド（Sard）川、バーズフト（Bāzft）川、トゥスタル（Tustar）、ザンデルード（Zande Rūd）川の水源地であるザルデ（Zarde）の頂の非常に心地よげな、泉が多く、牧草が限りないある山上に住んだ。

『ムンテハブッタヴァーリーフ』（Natanzi/Aubin, 43-45）にも、

シャムスッディーンは、ロレスターンに帰ってみると、国は荒れ果て、農民は流浪していたので、一、二年の間、地租と臨時税を減免し、宜しく農耕と産業を奨励した。ロレスターンは、再び元の安定した状態になった。国土繁栄の一因は、アタベク・シャムスッディーンはモンゴルのやり方にならってヤイラークとキシュラークを選んだ。その結果、兵士の家畜に大麦の必要がなく、農民が誰からも圧迫を受けないように、冬はイーザジュとシューシュで冬営し、夏はザンデ・ルードの水源地であるクーヘ・ザルダック（Kūh-i Zardak）に来た。

とある。イーザジュは、カールン川の川岸にあり、『心魂の歓喜』「地理編」（Qazwini/Dadir-Siyaqi, 87）には、

第四候帯にある。小さな、熱暑地の市である。北の方角が塞がれているので、気候は悪い。しかし、雪山から四ファルサングなので、水は飲むことができる。

とある。シューシュはドゥジャイル（Dujail）川本流及び、本流と逆方向に平行して流れる支流に挟まれていて、『心魂の歓喜』「地理編」（Qazwini/Dadir-Siyaqi, 87）に、

アルージ（ᶜArūj）すなわち、スース（Sūs）と呼ばれる。（中略）小さな市であり、二方向に川を控え、庭園が多い。ナリンジ、タリンジ、レモンが多い。熱暑地の樹木が多い。

とある。現在、ともにフーゼスターンの東辺にあり、クーフ・イ・セフィード（Kūh-i Sefid）山脈を経て、東に至れ

ばバフティヤーリー・チャハールマハール地方である。

夏冬の遊牧制を取り入れたのは、大ロルの全人口ではなく、アタベクと家族及び家政機関、政府機構であり、多数の兵士を伴っていた。ファズルーイェ家がマムルーク部隊を擁していた証拠はなく、兵士の主たる供給母胎は、かって各地より召募した多数の部族集団であり、従って、これらの集団は遊牧的要素が強かったと考えられる。アタベク自身及び兵士が、夏営地、冬営地制を採用したことは、とりもなおさず、かってファズルーイェ家の領土に定住した諸集団中の遊牧民も同様の遊牧制度を採用したと考えることができる。そして、これが領内における農耕の振興の原因であったのであるから、大ロル領は産業構造上遊牧あるいは、半遊牧の単一構造なのではなく、多数の農民が定着農耕を営んできたことが知られる。しかし、これだけでは、遊牧するものと、農耕を行うものが別個の集団であるのか、あるいは遊牧するものが農耕もおこなっていたのかを判断することはできないであろう。

夏営地は、ザグロス山脈の分水嶺地帯であり、冬営地は首都イーザジュとその北のシューシュすなわちスーサンであり、『選史』はシュシュタル則ちトゥスタルに至るとする。モンゴル支配以前のロレスターン、大ロルの範囲を遙かに越えて、フーゼスターンの中央部に夏営地を設定している理由は、同家がイルハンにより承認されていたに違いない何らかの支配権を有していたと見ることが可能であろう。

アルプアルグーは、『ムンテハブッタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 44) によると、六七〇（一二七一／二）年、『世界を飾る者の歴史』(Ghaffari/Minovi, 171) によると、六七二年第二ジュマーダ月七日金曜（一二三七年十二月二〇日）に死亡した。『選史』(Qazwini/Navai,545)、『シャラフ・ナーメ』(Bitlisi/Vasilieva, 97)、『清浄園』(Khandamir, IV, 626) には、没年の記載がない。『選史』は、

十五年ほど統治した後死亡した

とするが、この著者は先代の兄テキラの没年については述べていない。アルプアルグーは、二人の息子を残した。ユースフシャーとイマードッデーン・パフラヴァーンである（Qazvini/Navai, 545）。

第二節　ユースフシャー

アルプアルグーが、六七〇（一二七一／二）年頃死亡すると、息子のユースフシャーが、アタベクの位に即いた。彼は、ケルマーンのスルタン・ロクヌッディーンの外孫であった（Wassaf/Ayati, 149）。ユースフシャーは、即位後も領地に居ることが少なく、二百騎の家臣を率いてイルハンのオルドにいた。『選史』（Qazvini/Navai, 545）には。

バラークとの戦争に際しては、ロレスターンから、帝王の援軍に全軍を率いて、その戦闘で勇気有る武者ぶりを示し、帝王のお褒めの栄誉によくした。

とある。チャガタイハン国軍のイラン侵入は、六六八年（西暦一二七〇年）の事であるから、アルプアルグー生前の事件である。

さて、ドーソン（佐口訳、第五巻、四三頁）は、アバカは、チャガタイハン国に対する勝利の後、首都帰還の途についたが、ダイラムのシャールード流域を通過中、住民の奇襲を受けたことを記している。この時、ユースフシャーは大いに奮戦し、アバガの乗馬が傷ついたのを見て、自分が乗っていた馬を献じ、この勇敢な行動のため領地の加増に預かった。ドーソンの記述は、『選史』によるが（Qazini/Navai, 545）、それには、

アバガ・ハンがギーラーン、ダイラマーン方面に行った時、反徒の一団がシャーを襲撃した。ユースフシャーは、直ちに下馬して、この反徒にたち向かった。酔った象のごとくに彼らを殺し、ついに女王（チェスのビショップ）は、囲みを破り、シャーを救った。

とある。『集史』(Rashid/Alizade, III, 151)には、六七四(一二七四/五)年の年次があり、アバガは

アランに冬営を命じられ、ある日狩りのために騎乗された。シャールードから五ファルサングの所を通った時、森林の中で、野牛の狩りをした。突然土地の者が剣と投げやりで御前に襲いかかった。騎兵が突進して彼らと戦い、彼らは遂に逃げた。諸国の軍隊の召集され彼らの討罰が命じられた。軍隊が集まるとその集団の支配者は恐れて、剣と経かたびらをもって、御前にまかりでた。

とある。また、『ヴァッサーフ史』では、彼が、アバガの時代にバハードルと呼ばれた理由をギーラーン遠征の折の出来事に求め、

アバガ・ハンが、ギーラーンに軍隊を率いた時、そこに隠れていた敵の軍隊が、突然現れ、彼の周りを取り囲んだ。イルハンは、馬から降りた。この時、ユースフシャーは、直ちに駆け付け、自分の軍隊の若者と一緒にイルハンの命を救った。

また、『ムンテハブッタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 44)には、

アバガ・ハンが、ギーラーンとダイラマーンの征服を行った時、偶然次のような事件が起こった。帝王は若干のお供をつれて、圧倒的な敵によって大変な危機に陥った。すんでのところで、捕虜になるところであった。ユースフシャーは、馬から降りて、剣を振りかざしダイラム人の中に飛び込んで、大いに働きを示した。ハフトハーン、ロスタムダール、マーザンタラーンを席捲した。

とある。諸史料の内で年次を記しているのは、『集史』だけである。また事件の起こった場所についても諸史料中に細かい一致があるわけではない。ラシードッディーンは、最初の襲撃事件を狩猟の最中に生じた遇発的なものとし、その後で、遠征軍が召集されたと述べる。その他の年代記は、この間の事情をひっくるめて一つの出来事のように述

べている。ラシードッディーンは狩猟の場所がシャールードのどちらがわの五ファルサング則ち約八〇*km*であるのかは記さないが、シャールードの西八〇*km*はムガンであるので、事件はシャールードを越えた東側ギーラーンあるいはダイラマーン地方で起こったのであろう。ギーラーンはカスピ海南岸とエルボルズ山脈に挟まれた地域西部の海よりダイラマーンは山よりの地域の称であるが、十四世紀アブーサイドの遠征まで、モンゴル人の支配下にはなかった。

『選史』(Qazvini/Navai, 545) によると、アバガはこの功績をめで、ユースフシャーに

フーズィスターンの諸王国、クーヘ・ギールーイェ (Kūh-i-Gīlūye)、フィールーザーン (Fīrūzān) とジュルバーダガーン (Julbādagān) の二郡 (shahr) を与えた。

また、『ムンテハブッタヴァーリフ』(Natanzi/Aubin, 45)

ファールスとフーゼスターンから、クーヘ・ギールーイェを、イラークから、フィールーザーンとジュルバードガーンを彼に与えた。

フーイルーザーンはおそらくイスファハーン・トゥマーンのフィールーザーン郡で、ジュルバーデガーンは、コム及カーシャーン・トゥマーンの同名の郡で、十四世紀に国税は各々一三四、五〇〇ディナール、四二、〇〇〇ディナールであった。

クーヘ・ギールーイェは、『心魂の歓喜』「地理編」(Qazvini/Le Strange, Text, 127, 199,/Dabir-Siyagi, 152–153) には、「ジャバル・ジールーイェ」(山の名前としては、「クーフ・ギールーイェ」) とみえ。

広大な山国で、多くの地域からなっている。気候は、冷涼である。河川が多い。樹木は数えきれず、果実が多い。ここの狩猟場はよい。住民はスンニー派のシャイフィー法学派である。

とある。今日、クーヘ・ギールーイェは、ザラービー[9]によると、「東はファールスとディナール (Dinār) 山、北はジ

ャーネキー（Jāneki）とバフティヤーリー（Bakhtiyārī）、南はママッサニー（Mamassanī）、ガシュガイ（Qashqai）とリーラヴィー（Līravī）、西はハフトグル（Haftgul）とアーガージャーリー（Aghājārī）に接して」いる。[10] ようするに、クーヘ・ギールーイェは、ロレスターン、ファールス、フーゼスターン三国の国境地帯に当たるのである。[11] フーゼスターン南西部は既にアタベク・ハザーラスブの時代にファズルーイェ家領となり、ファールスのサルグル家との境界は、フーゼスターンとファールスを隔てるテブ（Teb）川、およびシャープール（Shāpūr）、カーゼルーン（Kāzerūn）西方のヘレ（Helleh）川であるが、両河川の中間にあるシーリーン（Shīrīn）川上流域の帰属は不明であった。『選史』（Qazvinī/Navai, 545）には、

ユースフシャーは、クーヘ・ギールーイェに遠征し、シュール（Shūl）人と戦った。ナジュムッディーン・シュールの兄弟がこの戦いで殺された。

とあり、『ムンテハブッタヴァーリーフ』（Natanzi/Aubin, 45）には、

アタベク・ユースフシャーは、勅書の命令によって恩恵の諸国を所有することを望んだ。ナジュムッディーン・シュールの兄弟は従わず、戦った末に殺された。

とある。シュール人は、イラン系の遊牧民あるいは半遊牧民であった。彼らはかつてロレスターンに居住していたが、ファズルーイェ家に逐われ、ファールスに移住していた。彼らの領袖は代々ナジュムッディーンを名乗っていた。ここに名前のみえるナジュムッディーン自身は、六七七年にニクダリー二千人が、ファールスに侵入した時、シーラーズのモンゴル人シャフネに従って出陣している（Rashid/Alizade, III, 151-152）。

ミノルスキー（ibid., 827）は、ユースフシャーが「ママーサニー地方に居住していたシュール人を攻撃した。」とするが、史料のこの文脈からはユースフシャーが国境を越えてファールスに侵入し、新しくシュール人の居住地となっ

ていたノウバンジャーン地方、後のママーサニー地方のシュール人を討ったとは考えにくい。ナジュムッディーンは、ファールスのノウバンジャーン・シュール人の長ではあるが、ここで問題となっている場所はクーヘギールーイェだけだからである。そもそも、クーヘギールーイェは、アタベク・ハザーラスプが武力で征服し、この時アバガ・ハンから公的に授与されたにもかかわらず、帰属はユースフシャーの息子アフラスィヤーブの代になっても決着していなかった。ほとんど都市のない国境の山岳地帯の掌握は困難であったのである。従って、一旦ノウバンジャーン地方に移住したシュール人が再び、クーヘ・ギールーイェに帰還したか、あるいはこの地域には、まだシュール人の一部が残存していて、ファールス国境内の同胞の力を借りてファズルーイェ朝に反抗しようとしていったのであろう。

『選史』に、フーゼスターンの諸王国を与えたとする部分は、『ムンテハブアッタヴァーリーフ』に「ファールスとフーゼスターンからクーヘ・ギールーイェを」とあって、後者は、ファールスとフーゼスターンの間にあって、両方に属してるクーヘ・ギールーイェが与えられたの意味であろうが、しかし、『選史』の記述を不正確であるとして退けることはできない。というのは、ファズルーイェ家の冬営地は、トゥスタルに及んでいたのであるから、これを政治的支配権とは無関係に、冬営地のみが存在していたと理解するのは不自然であるからである。

アバガが没し、テグダルがアフマド・ハンとして即位するとアバガの息子アルグンは、ホラーサーンで兵を挙げた。ユースフシャーは、テグダルの命をほうじて、騎兵二千、歩兵一万人を率いホラーサーンに出兵した。アルグンの勝利後、ロル兵は、砂漠の道をタバスからナタンズに取って、帰国しようとしたが、途中飢えと渇きによって大部分が死亡した。歩兵一万と言う余りにも多い数をミノルスキー（Minorsky, Lur-i Buzurg, 827）は、『モンテハブッタヴァーリーフ』によって（Natanzi/Aubin,45）二千に訂正しているが、大ロル単独の軍隊としてはそれでも強力である。隣国ヤズドの例では、バグダード遠征に三百人、サルジュークシャーの反乱に際してのファールス出兵に五百騎を出

しているだけだからである。アフマド・ハンは、すでに六八二（一二八三／四）年のニクーダーリー軍侵入の風聞の折、またファールスに派遣した特使ターシュマンクー（Tāshmunkū）後援の為にも大ロル兵を動員させている（Vassaf/Ayati, 75, 122）。イルハン国の南イラン支配に大ロル兵の存在が重要であったことが指摘される。

『選史』（Qazvini/Navai, 546）には、

アルグン・ハンはアタベク・ユースフシャーフをホージャ・シャムスッディーン・ムハンマド・サーヒベ・ディヴァーンの身柄を求めてロレスターンに遣わした。彼はサーヒブと供に御前に来た。サーヒブは、娘ドウラト・ハトゥンを彼に嫁がせた。サーヒブが処刑されると、アタベク・ユースフシャーはアルグン・ハンの命令を得てロレスターンに帰った。クーヘ・ギールーイェに向かった。途中悪夢を見た。恐れてひきかえた。幾ばくもなくして六八〇年、神の御近くに身罷った。

『ムンテハブッタヴァーリフ』（Natanzi/Aubin, 45）は、

サーヒブはゴムにいた。大げさにし、頼んだけれどアタベクは聞かなかった。望まぬながら、しかたなく御前に連行した。アルグン・ハンは彼の奉公を誉め、直ちにロレスターンにつかわした。この後信仰の喜びを集め、統治のことは喜びの書付けに定まった。六八五年に身罷った。

とある。アタベクの没年は、また『シャラフナーメ』（Bitlisi/Vasilieva, 98）によれば、六八四年である。アルグン・ハンのクーデターは、六八三（一二八四）年の事件で、シャムッディーンの処刑もこの年である。現代の研究者は、彼の没年を、ソトゥーデ六八四（一二八五／六）年、シュプーラーは、六八七（一二八八）年ごろ、エクバールは六八八（一二八九／九〇）年としている。[12]

シャムスッディーンは、娘のドウラト・ハトゥンをユースファシャーに嫁がせたと述べられているが、ガズヴィー

ニーは、この結婚の詳細については述べない。

ユースフシャーには、アファラスィヤーブ、アハマドの二子があったが、アタベクの位を継いだのはアフラスィヤーブであった。『選史』(Qazvini/Navai, 546) には、

ユースフシャーには、アフラスィヤーブ、アフマドの二子があったが、ブガ・チンクサンクと御前の将軍達の処置により、ロレスターンの統治権は、アフラスィヤーブに決まった。

とある。しかし、『ムンテハブアッタヴァーリーフ』(Natanzi/Aubin, 45) には、

アフラスィヤーブは奉仕においては自分が(後継者)として、好ましいことを、アルグン・ハンの好意のおぼしめしに期待させ、将軍たちの心中に好意をいだかさせた。特に、プラド・チンクサンク(Pulad Chinksank)は彼に恩恵を命じた。

とあって、チンクサンクの名はプラドと記されている。

アルグン・ハンのクーデタの立て役者ブガにチンクサン(宰相)の称号が与えられたのは、一二八六年二月二十四日(六八四年ズルヒッジャ月二十七日)のクビライの使者到着以後である。なお、ブカは一二八九(六八七)年の宮廷クーデタで失脚する。クビライが派遣したプラド・チンクサンのイラン到着も六八四年である。[13]

結語

本稿は十三世紀二十年代から、八十年代半ばまでの大ロルの重要な事件を追って、一次史料と主要な研究の後をなぞったものである。具体的事実として、モンゴル人のハザーラスプ朝優遇の過程を示すことができたが、バグダードからの敵前逃亡および、モンゴル軍との戦闘という重大な行為にも係わらず、王朝自体の廃絶には至らなかった。モ

ンゴル人はジバール、フーズィスターン間の要地に居住するロル人を間接的に統制するための媒介者として、ハザーラスプ朝を確保することができたのである。また、それによって、ハザーラスプ朝の擁する数千のロル兵を南イランの治安確保のために利用することが可能になった。イルハン国の軍事、内政に占めるハザーラスプ朝の存在の重要性の結果として、同朝とジュヴァイニー家との婚姻関係が挙げられる。国家中央の官僚にとっても、地方王朝にとってもこのような関係が望ましいものであることは疑いない。これをもって、外来者の支配に対抗するためのイラン人のネットワークが形成されたと言っても、大きく誤ってはいないであろう。

注

(1) 『弘前大学人文学部文経論叢』第二十一巻第三号

(2) 同上第二十二巻第三号

(3) これまでの拙論にもちいられなかった新しい史料は、東京外国語大学の八尾師誠氏将来の『マジュムル・アンサーブ』(Muḥammad b. ʻAli b. Muḥammad Shabānkarāʾi, *Majmuʻ al-ansāb*, Be-taṣḥīḥ Mirhashim Muhaddath, Tehran, 1363) のみである。八尾師氏には、この紙面を借りてお礼申し上げる次第である。引用文献の省略等は前掲論文と同じである。

(4) 北川前掲論文『弘前大学人文学部文経論叢』第二十二巻第三号七三―七四頁

(5) 更に、断定的に述べれば、ジュヴァイニーの用法では、ロルは、常に小ロルを指し、大ロルは、ロレスターンと呼ばれている。アルグン・アカが、グユクの即位式に赴いたときには、ロルの使節をともない(Juvaini/Boyle, I, 250)、グユクは彼にこの地方を与えた(ibd., 257)。一方、タイマス、タイナル二将軍にイスファハーンを追われたスルターン・ジャラールッディーン・ホラズムシャーは、ロレスターンで陣営を立直し(ibid., II, 437)、キルマーンのスルターンは、ロレスターンに荷物を置いてカラコルムに向かった(ibid., II, 481)。また、大ロルのハザーラスフは、ロレスターンとファールス国境の一城にロレスターン、シューレスターンの軍勢を集めモンゴル軍と戦おうと提案した(ibid., 383)。しかし、一二二四年ジャラールッディーンが、シャープールハーストに留まった時、彼のもとに集まったのはロル人の武将達であり、イルビルのムザッファルッディーンの家臣であり、山賊を生業としていたのは、ロル人とクルド人であった(ibid. 422-423)。唯一つ、例外は、ジュヴァイニーが、ハザールアスプを往古のロルの諸王の子孫であると述べている点のみである(ibid, 382)。ボイル(ibid., 382)は、ジュヴ

ァイニーが、大ロルと小ロルの支配者の系図を混同したものと考えるが、必ずしも混同とは言いきれないであろう。このように、ジュヴァイニーがロルと言うときは、全て小ロルなのである。

(6) Minorsky," Lor-i Bozorg", 47 ; Abbas Eqbal, 442–443 ; Sotude, 2, 127 ; Spuler, Hazaraspids, 337)

(7) ドーソン、佐口訳第四巻、二六二頁；Iqbal, 444–445；ザルダは、Mnorsky は "Zardak" 『シャラフ・ナーメ』には、"Dizva" とある。十年前に 24,000 デルハムで購入されたものである。

(8) イクバールは、没年を六七二年（s.445)、ソトゥーデは六七一年（Sotude, II, 147）シュプーラーは、息子ユースフシャーの在位の初めを六七三年（Hazaraspids, p. 161）とする。

(9) Manuchehr Zarabi, "Tavayf-i Kuhkiluya", *Farhang-i Iran-Zamin*, IX, 278–302

(10) 北川前掲論文『弘前大学文経論叢』第二十二巻、第三号、六七—七二頁。
尚、この地名については、東京外国語大学の上岡弘二氏から、エザーフェの入らない Kuhgīlūye であるとの指摘を頂いたが、ここでは、中世ペルシャ語文献に見えるかたちを採った。現代語地名としては、Kuhgīlaye が正しい。

(11) アハマド・エクタダリー氏の歴史地理研究書『フズィスターン、クフギルイェ、ママサニー』テヘラン、一三五九年は、キャリーム・ニークーザド『チャハールマハル地方の知識』イスファハーン、一三五七年、アフマド・キャスラヴィー『フズィスターン史五〇〇年史』二五三六年等と共に、上智大学小牧昌平氏の蔵書を借用することができた、ここに紙面を借りてお礼申し上げる。

(12) Sotude, II, 138 ; Spuler, Hazaraspids, 337 ; Iqbal,

(13) Rashid/Alizade, III, 205